P32裏表紙

C

B

Photo by YUHEI MIYATA

【主　催】公益財団法人名古屋市文化振興事業団
【協　力】ステキブンゲイ、ナニヨモ、愛知淑徳大学

P1 表紙

コトノハなごや

KOTONOHA NAGOYA©

開催報告２０２３
－2023REPORT－

A

公式ウェブサイト
https://kotonoha.nagoya-bungei.com/

コトノハなごや

開催報告２０２３
ー２０２３REPORTー KOTONOHA NAGOYA©

目次

２　募集要項、課題写真、入賞
３　入賞・入選作品一覧
４　選考員コメント、課題写真提供
５　金賞作品
６　銀賞作品
８　佳作作品
１０　入選作品
２５　最終選考、コトノハなごやサロン
２６　メディア掲載・広報普及活動
２７　制作物
２８　開催概要、スケジュール
２９　募集結果データ

募集要項

●募集対象　名古屋圏域（愛知・岐阜・三重）に在住の方

●募集作品　A～Cの課題写真から1枚を選び、そこから連想する200字以上800字以内の“名古屋を感じられる”短編文芸作品
※日本語・自作未発表の作品とし、合作・共作・連名による応募は不可とします。
※お一人3作品までご応募いただけます。ただし同じ写真で複数の応募はできません。

●応募方法　公式ウェブサイト内応募フォームからの応募を推奨。郵送受付も可。

●公式ウェブサイト　https://kotonoha.nagoya-bungei.com/

課題写真

A 栄・大津通冬のイルミネーション

B お抹茶、お菓子、お茶席

C 地下鉄名城線名古屋城駅

入賞

・金賞　（１作品）…賞状、賞金５万円
・銀賞　（２作品）…賞状、賞金３万円
・佳作　（２作品）…賞状、図書カード5,000円分

入賞・入選作品一覧

※入選２０作品。入賞はマークのあるもの。

選択写真	作品タイトル	氏名または ペンネーム	掲　載 ページ
写真 A	青の道	さんはち	6
	思い出の光	ASAYAKE	10
	紙袋を提げて	鮎村咲希	11
	空を飛ぶ	松原　凜	7
	パルコ前、午後4時47分	Writer Q	12
	約束	外山　雪	13
	夜、栄で	まちこ	14
写真 B	あまく、にがく、笑う	杜　文月	15
	お抹茶には笑顔が一番	服部　誠	16
	（日本昔話）:京都の抹茶と名古屋のわらび餅	高瀬奈々	17
	ひまわり	平山美帆	18
写真 C	明日からは/も	山尾晴海	19
	金鯱遊覧飛行	勉斗雲	20
	婚活ロード	加藤淳子	21
	地下鉄出入り口前にて	二島なつめ	8
	名古屋城	きんたろう	22
	名古屋城の子	安堂	9
	BLUE	サノアイコ	5
	僕の知らない青春	佳加	23
	真夏の夜の	もち福	24

選考員コメント

太田忠司　Ota Tadashi
作家

昨年は候補作に「語り手の正体を最後に明かす」という形式のものが多く、いささか辟易したのだけど、今年の候補作にはそれがなかった。ああいうのも流行なのだろうか。そのかわり今年は素直に物語を綴るものが多かった。銀賞を受賞した「青の道」はその典型にして最上作。とても気持ちよく読ませていただいた。金賞受賞の「BLUE」も実は同系統なのだが、文体がすこぶるユニークである。詩的、というかラップのリリックのようで、とにかく心地好い。映像がはっきりと見える描写も巧い。これまでの「コトノハなごや」にはなかったタイプの作品だが、それだけに今作が金賞になるのはコンテストの幅を広げ有意義なことだと思う。

１９５９年、名古屋市生まれ。名古屋工業大学卒業。１９８１年「帰郷」が星新一ショートショートコンテスト優秀作に選ばれ、１９９０年「僕の殺人」で長編デビュー。２００５年『黄金蝶ひとり』でうつのみやこども賞受賞、２０１７年『名古屋駅西　喫茶ユトリロ』で日本ど真ん中書店大賞第三位。著書は他に『新宿少年探偵団』『奇談蒐集家』『ミステリなふたり』『麻倉玲一は信頼できない語り手』他、多数。

中村　航　Nakamura Kou
作家

「物語が始まる」
この一年、かつての人流や生活が（かつてとは違う形であったりしながら）戻りつつある。そのなかで応募いただいた作品を読ませていただき、うまく言えているかどうかはわからないけれど、始まったんだな、という思いを持った。
昨年、一昨年は、ショートショートのような、うまくオチをつける、という作品が多かったように思う。本年の応募作には、確かな〝現在〟が息づいており、ラストが何かの始まり（の予感）になっている作品が多かった。
自分は自分の連続した時間を生きているので、内的な世界の変化に気付かなかったりする。だけど本年の応募作には、全般に〝始まり〟のようなものがあった。読んでいて気持ち良かったし、とても嬉しかった。

岐阜県大垣市生まれ。２００２年「リレキショ」にて第３９回文藝賞を受賞しデビュー。続く「夏休み」、「ぐるぐるまわるすべり台」は芥川賞候補となる。ベストセラーとなった『１００回泣くこと』ほか、『デビクロくんの恋と魔法』、『トリガール！』等、映像化作品多数。アプリゲームがユーザー数全世界２０００万人を突破したメディアミックスプロジェクト『BanG Dream!』のストーリー原案・作詞等幅広く手掛けており、若者への影響力も大きい。

中村陽子　Nakamura Yoko
新聞記者・編集者

選考に携わり、今年で３回目です。昨年までは、オチにどんでん返しを用意した作品が多い印象でしたが、今回はさりげない結末が目立ちました。パターン化を打ち破るための工夫をした応募者が、おそらくたくさんいたのでしょう。
金賞受賞作も、重要な内容を最後に置いていますが、これみよがしな感じがしません。女性の複雑な心理を静かに表現しており、散文詩のような構成にも惹かれました。
軽やかなユーモアを感じさせる「空を飛ぶ」、名古屋弁に勢いのある「金鯱遊覧飛行」なども、作者が楽しく書いていることが伝わる作品でした。
今後もこの公募に、新鮮で楽しい入選作が、積み上がってゆくことを期待します。

中日新聞三重総局デスク（文化、経済担当）。１９７４年、名古屋市生まれ。１９９８年、中日新聞社入社。東京本社文化部、名古屋本社文化芸能部などをへて現職。文化芸能部で、朝刊連載漫画「喫茶アネモネ」（柘植文著）、ビジネスサイト「ビズナビ」の漫画「全員記憶喪失オフィス」（増村十七著）などを企画。

課題写真提供

宮田雄平　Miyata Yuhei
フォトグラファー

名古屋市在住。名古屋ビジュアルアーツ専門学校 写真学科を卒業後にフリーランスのカメラマンとなる。雑誌や書籍、広告、ライヴやイベントなどの撮影を行いながら、ライフワークであるスナップ撮影やワークショップの講師を行う。写真撮影と街撮りコラムを執筆した『ナゴヤ愛 地元民も知らないスゴイ魅力』（秀和システム・刊）を出版。

金賞

BLUE

サノアイコ

じわじわ進む腕時計の秒針
さっきから五分も経ってない
目線をあげる
信号が変わる、赤、止まる
隣の人と笑う
ひとり俯く
風が吹く
信号が変わる、青、進む

電話をかけようかな、と迷う
いや、もう少し後にしよう
コートのポケットへ手を入れたら
折れ曲がったドニチエコきっぷが出てきた
日付を見ると去年の大晦日

あ、初詣か
3年ぶりの終夜運行
靴下2枚履いて、カイロ背中に貼って
熱田神宮でじりじり境内を進むかんじ
寒かったけど、楽しかったな
真夜中の名城線は
どこかよそよそしく
けれど確かに、新しい年を走った

思うようにならない前髪を
強い風が乱していく
桜はまだだと思い知らせてくる
君もまだ来ない

待ち合わせをするのが減った
でも一緒に過ごす時間が増える
嬉しいはずなのに、少しだけ寂しい不思議
贅沢な不思議

知らない間に変わっていく
怖いことも素敵なことも
どんどん平気になってしまう
青信号で進む人たちにまぎれて
君から遠ざかってみたくもなる

「ごめん！思ったより遠かった！」
眉を八の字に下げて
照れたように笑いながら走ってくる
面白い顔だな、と私も笑うと
怪訝な顔をしたので更に笑った

この人と
来年も初詣に行けますように
神様もいないところで願ってみる

「…そう言えば駅の名前変わったんだよなぁ」
「俺、市役所も好きだったよ、なんかこう渋くてさぁ…」
信号が変わる、赤、君の独り言を聞く
ポケットの中のドニチエコきっぷのしわをのばす
風がまた吹く
青く抜ける想い

「桜が咲いたら名古屋城来ようよ、ビール飲んだりしてさ」
私が言う
「気が早いねぇ」
君が笑う
信号が変わる、青、じわじわ進む

私ももうすぐ
苗字が変わる

銀賞

青の道

さんはち

「『青の道』を行こうよ」
スイミングスクールからの帰り道、後部座席でチョコレートを頬張る彼は
いつもそう言って青のイルミネーション の大津通りを通りたがった。
青色ブームの１年生。
クロール25mを泳ぐことを目指している。

「曲がる車線にいたら『お月見団子の道』に行っちゃうから気をつけてね」

大きな交差点で車線変更をしそびれる私に向かって、ひとつ前の交差点
から一丁前に予告する。

大津通りに交わる広小路通の街路灯は、白いお団子が積まれているみた
いな形をしているから『お月見団子の道』と呼ぶ。
泳いでお腹がすいている時に『お月見団子の道』を通るとお腹がグゥグゥ
鳴ってしまうから気をつけてね、というわけだ。

うっかり広小路通へ曲がった時は、ふたりでパクパクと食べる真似をした。

ちゃんと『青の道』へ行けたときは、ウキウキするねと喜んだ。
「泳ぐとき、ゴーグルが青色だからってのもあるかもだけど、めちゃくちゃ
青い世界なの。プールの中にもキラキラがあれば25m泳げそうなんだけ
ど、息継ぎが難しいんだよね」
そう言って泳ぐ真似をしているのが気配でわかる。
「この道は何メートルあるのかなぁ」
泳いで進むことをイメージしている様子だ。
「ここならどこまでも泳げそうだね」
と言うと
「たしかに」とちょっと嬉しそうにこたえた。

１年生最後の泳力テストの日。
なんとか25mは泳ぐ！ と意気込む彼のかわいい背中を見送る。

テストを終え、転げるように走りよってきた彼の手には『48m』と書かれた
修了証が握られていた。

「よ、48メートル?!」
どういうことかとたずねると、
「25mで壁についてターンしたの！ もう後ちょっとで50mだったんだけど
惜しかった!」と得意げに言った。

帰り道『青の道』を通った。
「オレ、たぶんあの端っこまで泳げるよ」
彼は「オレ」と言った。
ウキウキした声で「オレ」と言った。

『青の道』を通ると思い出す。
「オレ」を思い出して笑ってしまう。

銀賞

空を飛ぶ

松原　凜

私は大津通りの上空を飛んでいた。

クリスマス前とあって、人の通りがにぎやかだ。

目下には松坂屋の赤い文字と、渋滞で鎖のように連なる車の列。まだ日が暮れるには早い時間帯だが、イルミネーションの青い光が栄の街を照らしこれから迎える夜の準備をはじめたところだ。

今日も忙しくなりそうだと思い、ふと疑問に思う。私はどうして空を飛んでいるのだろう。

「あなた、あなた」

妻の声で目を覚ました。

「もう、またこたつで昼寝して。風邪引いても知らないわよ」

「気をつけるよ」

私は返事をして、そばに転がっている玩具に気づいた。私がたった今まで作っていた、黄色の竹とんぼだ。

クリスマスに何がほしいと孫のタカシに尋ねると、○○えもんのタケコプターがほしいと言うので、竹とんぼ を作って黄色の絵の具で色をつけてやったのだ。なるほど、それであんな夢を見ていたのか。

再び作業に取りかかると、また瞼が重くなってきた。

私はまた、大津通りの上空を飛んでいた。何度試しても同じだった。どういうわけか、この竹とんぼをそばに置いて寝ると、必ず空を飛ぶ夢を見た。そしてこたつで細かい作業をしていると、眠気はいくらでもやってきた。

五度目のうたた寝では、テレビ塔が目前に迫っていた。私は慌てて避けて、テレビ塔の周りをぐるりと一周した。

私は長年タクシー運転手をしており、名古屋の街中を一日に何度も行き来する。夢の中でもやはり、見るのは仕事で見慣れた景色なのだ。しかし仕事とは違い、現実にはできないことも、夢の中なら軽々とできる。

いやはや。これはなかなか楽しいではないか。

そのとき、玄関の戸が開いて、タカシの声がした。

「おじいちゃん、タケコプターできた?」

タカシがそばにやって来て目を光らせた。

「ああ、もうすぐで完成だ。楽しみにしてろよ」

「うん!」

私は孫の頭をグリグリとなでた。

とりあえず、これを渡す前にもう一眠りしておこう。

佳作

地下鉄出入り口前にて

二島なつめ

さっきから着物を着た男二人が地下鉄の入口をじっと眺めている。

「また、新しい門ができましたな」

若い男が言った。

「うむ」

年老いた男は言葉少なだ。

二人とも着物を着ている。おまけに、ちょんまげを結っている。しかし、周りの人々は特に二人に注目しているわけでもない。地下鉄を降りた人々が階段を上ってくる。今日は休日のせいか、観光目的と思われる人も大勢いた。

「それにしても、たくさん人がおりますなあ」

若い男がため息とともに言う。

年老いた男が白髪交じりの長い眉をひそめた。

「……これも門であろうか?」

自問するようにつぶやく。

「はっ? えっ? 門ではないのでござるか?」

驚いた若い男を年老いた男はじっと見据えた。あごをさする。やがて、長いため息をつくと、

「まあ、門であろうな。ならば、我々門番がいなくてはなるまい」

と言った。

「また任務が増えますなあ」

若い男がうんざりしたように言う。

「これ、そのような物言いはしてはならぬぞ。我々は初代城主、義直様から仕える門番。城をお守りするのが務め」

年老いた男が若い男を戒めるように言う。若い男は肩をすくめた。

「あっちの門、こっちの門と休む暇もないなあ」

「我々に休む暇など必要なかろう。疲れて死ぬわけでもあるまい。もうとっくに死んでおるのだからな。そろそろあちらの門の交代の時じゃ。参るぞ」

年老いた男はそう言うと、颯爽と歩き始めた。若い男も観念したのか、すぐ後ろを歩き始めた。

そして、文字通り人ごみに消えていった。

佳作

名古屋城の子

安堂

「懐かしいな…」

そう感じたのは、改名された名古屋城駅の出入口に初めて立った夏の日のことだった。
目の前にはお堀の緑、振り返れば青い屋根の市役所。
ここに立つと、ふとそんな気分になる名古屋人は多いかもしれないが、
取り分け僕には郷愁に駆られるワケがある。

昭和40年代半ばの幼少期。この辺りに暮らしていた。
正確に言えば名古屋城からお堀を挟んだ北、当時、父が勤めていた会社の社宅に。
木造の平屋建て、風呂なし。
両親と幼い姉と僕の 4 人家族の住まいだったが、随分とちっぽけで古ぼけていた。

しかし、立地は最高!
なにしろ玄関を出ると、目の前に名古屋城が飛び込んでくるのだから。

僕は毎日、名古屋城を見て育った。
三軒先に住むケンちゃん家へ遊びに行く朝も、
裏の公園に紙芝居のおじさんがやってきた昼も、
母に手を引かれながら銭湯へ向かう夕暮れも…。
いつもいつも。
金のしゃちほこが凛と立つ名古屋城が目に飛び込んできた。

いつのことだったろう。
家の前でケンちゃんと遊んでいると、近所のおばさんにこう言われた。

「ここら辺の子どもはみんな名古屋城の子やで。金のしゃちほこみたいに立派になりゃあて」

果たして、幼い僕は名古屋城のことをどこまで認識していたのだろうか。
でも、よく理解していなかったとしても、
そう言われて、なんだか誇らしい気分だったことを鮮明に覚えている。

小学校に上がる前、父が会社を辞め、家族で祖父母のいる岐阜県へ引っ越した。
あれから半世紀。名古屋城とは随分と疎遠になってしまった。
ケンちゃんとも一度も会っていない…。

昔の思い出に浸りながら名古屋城駅の出入口からお堀に沿って歩くと、
木々の合間から、ようやく名古屋城が姿を現した。
夏の日差しを受け、しゃちほこが金色の光を放つ。

あの頃と、ちっとも変わらない。
名古屋城も。僕も。

「僕は名古屋城の子やなあ」
すっかりおじさんになったけど、名古屋城を見ると、やっぱり誇らしい気分になった。

入選

思い出の光

ASAYAKE

大学帰りって、高校の放課後よりも自由だ。

受験勉強のような束縛も無いし、アルバイトをしている今はお金もある。おまけに私服。オシャレを纏い、行動範囲が広がった私は、分かりやすいくらいに浮かれていた。
「ねぇ、これから遊ぼうよ!」
「うん! 行く行く!」
意気揚々と誘ってきた友達の美波は今、大須商店街にいるらしい。地下鉄鶴舞線に乗り換え、大須観音駅へ降り立った私。大きな赤提灯の下をくぐり、私も意気揚々と美波のもとへ向かった。

「あ、いた! こっちこっち?!」
手を挙げてそう叫ぶ美波。もう片方の手には、食べ歩きで購入したのか団子が握りしめられている。ちょうど夕方で、私も小腹が空いていたところだ。お馴染みの老舗“新雀”の列に並んで、美波と同じみたらしを二人で楽しんだ。
たくさんの人で賑わう商店街を楽しんだ後は、そのままの足で栄へ向かう。矢場とんの大きな看板を背に、頭上に広がる名古屋高速と矢場ブリッジを交差。お決まりのコースである。

しかし――今日はいつもと景色が違っていた。
日が沈みかけた大津通の街路樹に、イルミレーションが点灯している。その光に思わず足を止めた。地元とは 違う、色鮮やかな都会の輝き。大学に入学して、初めて冬を迎えたことを実感した。
「綺麗だね」
「うん――すごく綺麗」
スマホを構えてしまうのは必然だった。何枚か写真を撮った後、今度は美波とツーショットでパシャリ。
笑い合う私達の後ろには、光り輝くイルミネーション。名古屋での思い出がまた一つ、形となって増えていっ た。

楽しい瞬間を噛み締めながらも、私達の時間はまだまだ続く。次の目的地は PARCO。夜が許す限り、ショッピングやディナーを楽しむつもりだ。
歩行者用の信号が青に変わる。これからまだまだ知っていく名古屋の魅力に思いを馳せながら、私達は交差する横断歩道を渡り始めた。

入選

紙袋を提げて

鮎村咲希

松坂屋を出ると、街路樹の青いイルミネーションが目に飛び込んできた。

夕暮れの大津通を、私はうつむきがちに歩く。左手にまとめて提げた紙袋が、指に食い込んで痛い。

「待って、カナちゃん」

不意に名を呼ばれ、足を止めた。振り向くと、数メートル後ろに心細げな姿がある。私はあわてて引き返し、紙袋を右手に持ち替えて手をつないだ。

世話を頼まれたのは、今朝のことだった。大学が休講で暇だろうと、半ば無理やり押しつけられたのだ。二人で家にいても間が持てないため、栄まで出てきた。デパートのはしごで、時間をつぶすために。

売り場を見て回り、レストランで昼食を摂り、美術館の絵画展を楽しむと、すでに午後四時近くになっていた。帰る前に通りを歩きたいと言われ、こうしてつき合っている。

「見て」

突然ぐいと手を引かれ、私はつんのめるようにして立ち止まった。隣を見ると、空を指さす邪気のない笑顔とぶつかる。

「星が出てるよ、カナちゃん」

指の示す先には確かに、白く輝く星があった。その光を目にしたとたん、幼いころの記憶が一気によみがえってくる。

子供のころはよく、栄に連れてきてもらった。デパートを巡っているとすぐに時間が過ぎ、帰りが夕暮れにな ることもあった。そんなときは、輝きはじめた星を数えながら帰った。ちょうど今のように。

もしかして、憶えてくれているのだろうか。私の手を取り、この道を歩いたときのことを。紙袋を握り直すと、中身が揺れて音をたてた。あのころも毎回のように買い求めていた、両口屋の銘菓詰め合わせが。

「ほんとだ。綺麗」

私は声の震えを抑え、笑顔を作った。

「また来ようね、ばあちゃん」

入選

パルコ前、午後4時47分

Writer Q

パルコの前で、青いイルミネーションを眺めていた。ここに、あの人が来てほしい。

時間は、午後 4 時 47 分。

日は落ち、辺りはすっかり薄暗くなっている。煌めく青い光は通りのビルの壁面に行き交う人たちの表情を投影させていた。

俺はもっと、あの人に寄り添っておけばよかった。今更ながら後悔している。

どうか来てくれ、ここに。

これは、つい数時間前のことだ。

総合病院の寒々しい病室に俺はいた。看護師が俺を取り囲んでいる。

薄れる意識の中で、今までの人生のさまざまなシーンが走馬灯のように去来した。その中に、一際輝く青い光。

あれは、7、8 年前だったか? 妻と最後に二人で出かけた夜のショッピング。妻は毎年、俺とイルミネーションの時期に栄ミナミへ出歩くのを楽しみにしていた。

それなのに俺は「年も年だし、寒いから夜に出歩くのは嫌だ」と言って、翌年からは行かなくなった。

妻はせっかくの楽しみを奪われて寂しそうだったが、やがて病気が見つかり、俺に不満を言うこともないまま、去ってしまった。

もうすぐ、俺もお前のいるところに行く……。

そして今、身軽になった俺は、妻が大好きだったこの場所で待っている。年甲斐もなく以前のようにデートが したい。

一緒にいて、青い光の美しさを共感して寄り添える時間が、どれほど貴重なものか。俺は失って初めて気付いた。

その時、青い光源から、人の姿が現れた。

ああ！よかった。

「あなた」

孤独と侘しさで支配されていた俺の心に、ようやく一筋の光が差し込んだ。

「すまない。寒いから出かけるのが嫌だ、なんて言ってしまって。俺が悪かった」

「これからは毎年、一緒に来てくれますか?」

「ああ」

イルミネーションは、生きている人だけのものではない。この光はいろんな世界を照らして、再会へと導いて くれる。

「じゃあ、歩きましょうか? イルミネーションだけじゃなく、生きている人たちを観察するのも面白いんですよ」

入選

約束

外山 雪

一人で来たことを後悔し始めたところだった。

この季節、ただでさえきらびやかな街の中心部は、街路樹のライトアップでますます輝いている。

いとう呉服店へはどちらへ行きゃあええですか。

やわらかい声がすっと耳に入った。ユキコが振り返ると、小柄なおばあさんが困った顔をして立っている。微妙に周囲より浮いて見えたのは、着物の柄が地味だったから、だけではないような気がした。

「いとう呉服店へはどちらへ行きゃあええですか」

「いとうごふくてん?」

そんな店は知らないと言おうとして、何かが記憶にひっかかり、なんだっけ聞いたことがあるような、とスマホで検索する。

「あ、松坂屋の」

「ああいかん、しまった。今は松坂屋だった。前回はそれで失敗して会えんかったから…あの人とは空襲がひど くなってから離れ離れになってまってねえ。いとう…いや松坂屋ならいつの時代でも会えるだろうと思って目印にすることにしたんだけども、あちらもつまずいとりゃあすかもしれんねえ」

おばあさんは真剣な顔をしてぶつぶつとつぶやいている。

「松坂屋なら、あっちですけど?」

ユキコは、松坂屋の方を指しながらも、どうにも心配でおばあさんについていく。

「会いたいひとには会いたいときに会っといた方がええよ。いつ会えなくなるかわからんでね。…あっ!」

おばあさんの頬が急に赤らむ。

視線の先を追うと、カーキ色の服を着た若い男性がたたずんでいる。あれは、教科書で見たことがある。国民服というのだったか。

「ありがとうおねえさん、今度こそは会えそうだわ」

おばあさんは、着物にもかかわらず身軽に駆けてゆく。二人の手が重なった、と思った瞬間、強い風が吹き、ユキコは目をつむった。目を開けたら、もう二人の姿は見えなかった。

しばらくして、ユキコはのろのろとスマホを取り出した。

今からでも間に合うだろうか。

そして、電話のアイコンをタップする。

入選

夜、栄で

まちこ

「エリ、ちょっと待ってよ」

エリは昔から歩くのが早い。今日の私は足が痛いのだ。妊娠中からずっとスニーカー生活をしてきたからか、産後一年経った今でも細身の靴はキツく感じる。

大学で一緒だったエリとは、就職してからも仕事帰りによく栄で待ち合わせをした。買い物したり、食事したり、カフェで遅くまで話したり…。

私の娘リコが一歳になった頃、エリはおめでとうのメールをくれた。私は返信のメールに思わず本音を書いてしまった。

楽しいけど、息の詰まる一年でした、と。

エリはその日のうちに電話をくれた。

「また、昔みたいに栄で待ち合わせしようよ」

夫は毎日残業で帰りが遅い。でもダメ元で聞いてみた。

「来週の金曜、エリと夜、出かけてもいいかな」

夫は一瞬驚いた顔をしたけど、なんでもない風に言った。

「じゃあ、その日は早く帰ってリコをみとくよ」

久しぶりの夜の栄、大津通りのイルミネーションの光があまりに優しくて、なぜだかしんみりとしてしまう。昔の自分なら、イルミネーションを見ればワクワクするだけだったのに。

リコは今頃なにしてるだろう。

リコにも見せたいと思った。もう一歳なんだから、親子3人で夜、出かけてもいいかもしれない。

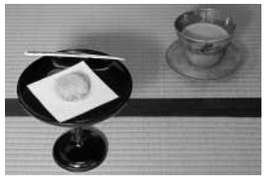
隣のエリは、さっきよりずっとゆっくり歩いてくれている。柔らかな青の光の下で、私は少しだけ泣いた。

入選

あまく、にがく、笑う

杜　文月

淳之介くんの実家を初めて訪ねた私はひどく緊張していた。
目の前には、漆塗りの高杯にちんまりとお行儀よく載せられたお菓子と、上品にそっと添えられたクロモジの楊枝。薄手で口径が小さめの茶碗に注がれたお抹茶。
お付き合いを始めてしばらくしてから瀬戸へ遊びに行き、一緒に陶芸体験をしたとき、淳之介くんは粘土をこねながらいったのだ。
「うちに抹茶茶碗が5、6個ある」
「へえ。淳之介くんもお抹茶たてることあるの」
「ある。ばあちゃんがよく抹茶をたててだしてくれるから、見よう見まねで」
家に抹茶茶碗があるなんて、どれだけ育ちが良いのだこの人は、と、私はその時正直腰が引けてしまったのだ。
しかしそんな気持ちになったのは、その時だけで、それから取り立てて価値観の違いを感じることなどはなくしばらく付き合いが続いて今に至る。
しかし、いざ瓦屋根の伝統的な和風建築の実家を訪ねてみると、予想通り淳之介くんのおばあさまが、お抹茶をたててしずしずとおもてなししてくれたのだ。心づもりはしていたとしても、いざその状況に直面すると、やはり緊張するものなのである。
「そんなに構えんでもええよ。かなこさんの在所は、どこなの」
「私は神奈川出身なんです」
「そりゃとおくからきなさったね。このあたりではね、お抹茶は気軽に立てるもんだで、作法なんて気にせんでええからね。名古屋のモーニングがこんだけはやっとるのも、もともとお茶する習慣が根付いていたからっていう人もおるくらいだがね」
おばあさまはカカッと笑った。その明快な笑顔につられ、私は意を決した。まずはクロモジの楊枝でズバッと羽二重餅と思われるお菓子を切り分けた。餅はふにゃり、と静かに抵抗した。私もふにゃりとした笑いを浮かべてから、深呼吸して気軽に味わうモードに切り替えた。



入選

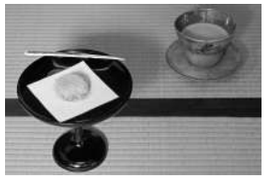
お抹茶には笑顔が一番

服部　誠

やばい。噂には聞いていたが、名古屋ではコーヒー代わりに抹茶が出るんだ。どうしよう。お嬢さんとお付き合いさせてくださいと、言いに来たのはよいが、抹茶の飲み方がわからねえよ。うわ、彼女の父ちゃん、ニタニタしてるよ。俺がきちんと抹茶を飲めるかどうか、見てやろうという魂胆だな。困った。とりあえずはニコニコしていよう。

やばい。娘の彼氏の東京モンが挨拶に来るというから、見栄張って抹茶なんかを用意したが、点て方がわからないから隣の部屋でスプーンですくって掻き回してきた。これでいいのか？ うわ、娘の彼氏、ニタニタしてるよ。抹茶飲んで、点て方がうまいかどうかを見てやろうという魂胆だな。困った。とりあえずはニコニコしていよう。

お父さん、どうして抹茶なんか点てたのかしら。名古屋は東京には負けないと、いつも言ってたから格好つけたのかな。ここはミエじゃなくて名古屋だってば。とりあえずはニコニコしているしかないな。



入選

（日本昔話）：京都の抹茶と名古屋のわらび餅

高瀬奈々

むかーしむかし
畳の上で、
京都の宇治抹茶と 名古屋のわらび餅が出会いました。

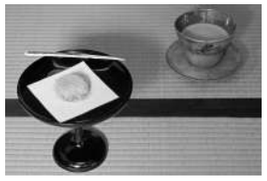
京都の抹茶が『名古屋には、有名な和スイーツが何もないどすな』と言うと、
名古屋のわらび餅は『なに言っとりゃーす。このわらび餅、でらおいしいがね』
と返します。
すかさず抹茶が尋ねます『そのわらび粉は、どちらでおつくりになったもの?』
『……九州産、だがね』ちょっとばつが悪そうなわらび餅。
慌てて

『ちがうて、
僕が言おうとしとるのは、
名古屋の職人は
日本中の良い材料を扱って
おいしいものを作る技量をもっとるってことだわ。
日本の真ん中だから、日本一のわらび餅ができるんだて。
“真ん中” に誇りを持っとるんだがね』と加えました。

『それじゃあ、あなたの “真ん中” に入れてはる、あんこは　どうどっしゃろ?』
　さらに尋ねられて、
『……北海道産、だがね』もっとばつが悪くなってしまったわらび餅。

ところが、
抹茶はクスクス笑いながら
『そういう所、
良いと思ったものは　全部　集めてしまう性格、嫌いじゃないですけどね』と
言いました。
そして
『今度、あこに連れて行っとくれやす……大須!』と、付け足しました。
それを聞いたわらび餅は、まん丸な体をもっと膨らませながら
『まかせやあ!　あそこは、みたらし団子もクレープも、古今東西　古きも新し
きも ぜーんぶ 揃っとるで! 』
胸を張って、約束したのでした。

おしまい



入選

ひまわり

平山美帆

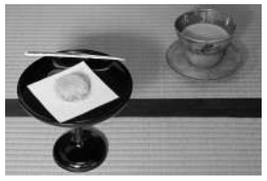
美智子さんを訪ねると、美智子さんは私の顔を見るなり眉間に皺を寄せた。
「ひどい顔ね。熱でもあるんじゃないの」
「ひどい顔なのは生まれつきですよ」と私が答えると、「ああ、それもそうね。でも伝染されても嫌だからねぇ」と美智子さんは頷いて、スタスタと和室の方へ歩いて行った。

「これ、美智子さんの好きな西尾の抹茶とおまんじゅう」私が風呂敷を解くと、美智子さんはわかっていましたよという顔をした。
美智子さんはあらかじめ沸騰させて冷ましておいたお湯を茶碗に注ぎ、電動の茶筅のついたブレンダーでクリーミィな抹茶を点ててくれた。
手首が痛くてお茶がうまく点てられないと言っていた美智子さんのために、私の夫が作った電動の茶筅。最初は こんなもの邪道だと言っていたけれど、気に入ってくれているようだ。

和室の窓から蝉の鳴き声がする。命の限りの大合唱が、うるさく感じなくなったのはいつからだろう。

「お茶には殺菌作用があるからね」美智子さんは、茶碗の中を見つめながら言った。
「大丈夫ですよ、私は熱なんてないです」
「そうは言うけどね、予防対策は大事よ」
「そうかもしれませんけど、部屋の中にずっといたらそれこそ病気になっちゃいますよ」
「籠っていてもあなたが訪ねて来るじゃない」と美智子さんは憎まれ口を叩く。相変わらず、視線は茶碗の中だ。

「もうすぐペルセウス座流星群が来ますよ。今年は日曜日が新月で、星空を見るのにぴったりなんです」
「あら、そう。良いわね」
「はい。明日の夜です。ちょっと夜更かしして流れ星を見ましょう」
「娘と、毎月科学館のプラネタリウムに行ってるの。だから私、星には詳しいのよ」
「……そうなんですね」
「私の娘はまだ小さくてね、よく熱を出すから心配なのよ。とってもかわいいの。今日みたいに夏の暑い日に生まれてね、ひまわりみたいに笑うのよ」
美智子さんは、……お母さんは、窓の外のひまわりを見てほほえみながら言った。



入選

明日からは／も

山尾晴海

「君も明日でお払い箱か」
もうすぐ一月四日を迎える深夜。
　地下鉄名城線、市役所駅七番出口の入り口（矛盾しているようだが、そうとしか形容できない）に僕はいた。
　声をかけた相手は木製の看板。黒い筆文字で大書された「市役所駅」。職場の最寄り駅として、四十年近く利用してきたが、明日から「名古屋城駅」に名前が変わる。その方が観光客に分かりやすいということだが、僕は一抹の寂しさを覚えていた。新聞で改称を知った時に芽生えた違和感は、日を追う毎に膨らんでいった。そして今、僕はここにいる。
「君は寂しくないか」
　無論答えはない。分かっている、自分勝手な感傷だってくらい。
　この春、僕は定年退職する。身を捧げたというほどではないが、ずっと勤め続けた職場だ。愛着がある。未練もある。これまでと異なる日々に不安がある。
　七番出口は、正確には職場の最寄りではない。他の出口から出た方が近い。それでも、この出口から出た時に眺める風景が好きだった。
　その生活がもうすぐ終わる。一足早くお役御免になる看板に、僕は自分を重ねていた。
「君はどこへ行くんだ?」
　他に使い道もなさそうな看板。捨てられるのだろうか。
（それならいっそ……）
　どうせ不要になるなら、僕が持ち帰っても問題ないのでは?
　恐る恐る看板に手を伸ばした。
　その時だった。
　ポケットの中で携帯電話が震えた。妻からのメールだった。〈どこまで行ったの? 明日から仕事でしょ?〉 僕よりよほど仕事のことを考えてくれていることがおかしくて、くすりと笑った。
　結婚する時の君も、こんな気持ちだっただろうか?
　慣れ親しんだ名前が変わること。生活が一変すること。一番教えを請うべき存在は身近にいた。
　時計を見る。まだ最終電車には間に合う。
〈今から帰るよ〉と返信した僕は、最後まで役目を果たし続ける先輩に声をかけた。
「長い間、おつかれさまでした」

入選

金鯱遊覧飛行

勅斗雲

　翔子は地下鉄・名古屋城駅の階段を登った。喜寿だから階段がえらい。地上に出ると、人だかりが空を見上げ ていた。
　翔子も釣られて空を見上げた。初夏の青空に、金色の物体が飛んで来る。
「金鯱や！金鯱が飛んで来たぞッ！」と隣のおっさんが絶叫した。
「何言ってりゃあす。飛ぶ訳ないがね」と翔子は、とがめた。
　ところが、金鯱が鰓をパタパタ動かして飛来し、翔子の目の前に降り立った。
「拙者、鯱丸と申すが、尋ねたき儀があっての」と喋った。翔子は仰天した。金鯱が喋る。
「ここらに金鯱横丁があるそうだが、何処でござるか」と鯱丸は訊いた。
「すぐそこだぎゃ」と翔子は鯱丸を案内した。二人（翔子と鯱丸）は、スマホを構える野次馬を縫って金鯱横丁 へ向かった。
「あんた、なんで金鯱横丁に行きたいんや」
「拙者の名前が命名されたと知り、見に参った」
「そうきゃあ。よくいりゃあた」
　二人は金鯱横丁に着いた。
「ここでござるか。よき匂いがするのぅ」
「きしめんだぎゃ。食べやあすか」
「是非とも」
　二人は、店に入った。客が総立ちになり、二人を囲んだ。翔子は、きしめん二杯を注文した。
「あたしの奢りや」
　鯱丸は「かたじけない」と、きしめんを、一口で食べ「美味じゃ」と眼を細めた。
「礼に、天守閣までお乗せしよう。拙者の背に乗って下され」
「ほんときゃあ」と翔子は鯱丸に乗り、天守閣に飛んで行った。
「テレビ塔の真上や。名古屋駅が見える。御嶽山も」
　二人は天守閣から名古屋城駅まで戻って来た。
「鯱丸さん、あした、亭主と来るから、また乗せてぇや」
「お易い御用」
　偶然そこに、名古屋市観光課課長がいた。
「金鯱さん、名古屋市の発展のため、名古屋城の見物客を乗せてもらえんやろか」
「無論、喜んで。拙者、名古屋が大好きでな」
　一週間後、「金鯱遊覧飛行」が企画された。
　鯱丸の女房・鯱御前も客を乗せた。
　世界中から名古屋に人が殺到し、瞬く間に、名古屋は世界一の観光都市となった。

入選

婚活ロード

加藤淳子

　これから僕は、婚活アプリで知り合った高野美香と初デートだ。歴史好きで意気投合し大阪から来てくれるのだ。「名古屋城駅」に現れた彼女は、オレンジ色のフレアスカートを靡かせて写真以上に麗しい。関西弁ののりの良さで、とてもフレンドリーだ。僕は地元の名古屋城を案内する。実は、歴史好きは彼女に近付くための方便。一夜漬けがバレませんように…。

　名古屋城に来たかった理由を聞いてみると、今、放送中の大河ドラマだった。

「MJ が 1610 年に建てたごっつ豪華絢爛のお城ですよ!」

「…家康が、ね」

「固いこと言わんとー。はよ行きましょ」

　MJ 好きか…とヘコむ気持ちを奮い立たせ、一夜漬けの蘊蓄(うんちく)を語り始める僕。

「金のしゃちほこ、どっちが雄か雌かわかる?」

「こっからわかるわけないやん」

「尾ひれが空向いて、口が大きく広げてるのが雄で、雌は黒目が端に寄っているんだ。北側が雄で、南側が雌なんだよ」

「さすがー」

と目を輝かせる彼女に、18 金の量や値段なんかも説明した。

「ここからだとわかんないけど、実際は大きいんだよ」

「知ってる。私、目の前で見たし、触ったもん」

「えー、ひょっとして『愛・地球博』の時、来たの?」

「そう、小学生の時、親と」

「僕もだよ。もしかして、その時僕たち会ってるかもね」

　話を盛り上げつつ本丸も案内し、金シャチ横丁でひつまぶしを頬張るところまでは良かった。が、僕はやってしまった。

「名古屋城は、へいじょうなんだよ」

「…へいじょうって、平城京?」

なんてとぼけてくれたけど、

「戦国時代は山の上が多かったけど、名古屋城は平地に作られてるでしょ」

「それなら、ひらじろ、ね。…ドンマイ!」

「そうとも言う」

ってボケたけど、バレたよね、えせヒストリアン。

　帰りの新幹線、おみやに海老せんべいの黄金缶を渡し、笑顔で別れたけど、どうだっただろう。

　その時ラインの着信音が高らかに鳴る。恐る恐る見て、思わずガッツポーズを取った。

入選

名古屋城

きんたろう

おい新ちゃん、いつから市役所駅が名古屋城駅になったんだて。

何? おまえ、知らんかったんか、市長が名古屋の名所を駅名にということで、今年の一月から名古屋城駅になったんだて。

知らんかったわ。でも名古屋城駅って名前長いし聞き慣れんので変な感じだわ。子供のころから市役所駅だったし。てか、もともと何でここが名古屋城駅じゃなくて、市役所駅だったんかな。最初から名古屋城駅にしときゃ良かったのに。だで人が来んかったんだわ。ん? 人来とったか?

どうだかな。でも、本丸御殿も金シャチ横丁も出来たで、よその土地の人からすれば、名前変えて良かったんだにゃあか、わかりやすなったし。

おまけに、天守閣も木造に建て替えりゃ、何かようけ人もくるがや。早よ建て替えてくれせんかしゃん。久しぶりに行きたいわ。名古屋城の思い出って、天守の最上階でお土産売っとったな。その記憶が一番だて。今でもあるんかな?

城の記憶がそれって、何言っとるんだて、新ちゃんは。名古屋城が泣くがや。でも金シャチ横丁にある義直ゾーンとか宗春ゾーンとかで、初めて徳川義直とか徳川宗春とか知ったわ、知っとった?

俺も知らんかったて。俺ら生まれてからずっと名古屋に住んどるのに、0点だわ。別に知らんくても何も影響あらせんけど、調べたら尾張徳川家初代が義直、七代目が宗春だって。宗春さん時、相当賑やかだったらしいわ。歴史を知るとまた名古屋城にも愛着わくわな。よっしゃ、じゃあそんな話を肴に今日金シャチ横丁で一杯やろまい。

そりゃええな、名古屋城が新しなってまた賑やかになれば、初代義直さんからは「よーしな(お)さった」なんて言われるかもしれんし、宗春さんには「胸張(宗春)る」事が出来るがや。アホか、つまらんダジャレ言うんだにゃあわ。

入選

僕の知らない青春

佳加

見ないうちに随分と変わってしまったのね。

彼女は静かに呟いた。最後にここに来た時は確か市役所だったはずなのに、と不思議そうな顔を浮かべて「名古屋城駅」と書かれた木製の看板をじっと見ていた。

そんな彼女の横顔をただ見ることしかできない。僕はここに初めて来たのだから無理はない。

「2023 年の 1 月から変わったみたいだよ」

「結構前ね。私たちが高校生の時かな」

「そうだね、もうちょうど 5 年前の話だ」

「5 年かぁ。早いね。確かコロナが緩くなってきた時よね」

今でもマスクをした彼女は懐かしそうな目をして僕に微笑む。その目の奥にはきっと僕のいない青春時代を写 し出している。それが少し寂しい。

僕たちは東京で出会った。同じ大学の同じ学部で同じサークル。親近感を抱いていた。極めつけは僕が働いて いたファミリーレストランに彼女が新人として入ってきた時。もう運命だと感じた。

良いことも悪いこともあったけど、一緒にいることを選んだ。

明日は彼女の両親に挨拶をする予定だ。

それなのに、なぜ僕は不安になっているんだろうか。知らない彼女がいることは当たり前なのに。

「ねぇ、どんな高校生だった?」

「僕はただ部活三昧だった気がする」

それっぽい! と頷く彼女。思いっきり、聞き返すタイミングを無くしてしまった。

風が吹いた。沈黙が完全に生まれた。それを埋めるように彼女は言った。

「私は青春らしいことは学校が規制しちゃって、塾に行ってただけ。だけど、それで良かった。あなたに会えて今ここにいるんだよ」

誰かが全ては繋がっていると言っていたけれど、本当にそうかも知らない。彼女の青春時代を知らなくたって僕にしか知らない彼女がいる。彼女が青春時代を過ごした名古屋を僕も好きになりたい。

優しい風が吹いた。

「そろそろ金山とか行こうよ。美味しいハンバーグ知ってるんだ」

彼女が僕の手を引っ張った。

僕たちは名古屋城駅の中に入って行った。

入選

真夏の夜の

もち福

暑い夏の終わり、帰りは名古屋城駅。

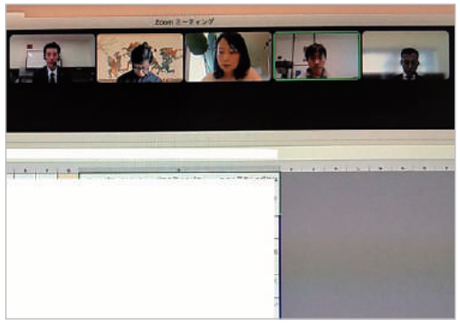
名古屋城駅の 7 番出口の門構えをくぐり、金シャチの蒔絵のような壁アートの階段を駆け降りる。
あれ?

階段を降りるとそこは武家屋敷通りだった。
え? 撮影?
駅の構内のはずなのに抜けるような青空、土の道に整然と並ぶ武家屋敷、大八車が道の真ん中で立ち往生してい る。
と、目の前で積み荷が荷崩れした。
「手伝います」
思わず駆け寄るとたぬき顔の男が振り返った。
「ありがとよ」
「ロケですか? 大がかりなセットですね」
散らばった荷物を集めながら聞く。
「ろけ? せっと? あんたどこの田舎だい」
「えっ」
方言だと思われているのか。
「あんた荷扱いがうまいね」
「配送の仕事で鍛えてますから」
「あんた飛脚かい、そりゃ助かった。俺ぁ不慣れなもんでちょいと手伝ってくれんか」
飛脚って昔のあれ、そのままの意味か。
「この荷を名古屋城三の丸前のお屋敷から、堀川で下って熱田の海から所領に送るのだ」
「熱田の杜じゃなくて?」
「熱田の杜にお鎮りになる熱田さんの向こうの七里の渡しよ」
やっぱりこれはロケじゃない、たしかに地下鉄名古屋城駅 7 番出口を降りたのに、ここは昔の三の丸の武家屋敷通り。
僕が手際よく荷物を積み込むと、男は付いてくるものと促してくる。

「これが本物の名古屋城か」
右手のお堀向こうに聳える石垣と城に感嘆していると、男が自慢そうに頷く。
「尾張名古屋の繁栄を充分に見聞して行きな」
 僕も生粋の名古屋市民なんだけど。
小一時間で堀川に着くと、荷下ろしして船に積み込む。
そのまま一緒に船に乗り込んで、名古屋の城下を川下り。
馴染んだ街並みと全く違う。
僕の家の場所はこの時代は海の下なんだな。

「ありがとよ」
七里の渡しに着くと男がお礼に銅銭をくれた。
 顔をあげると、ここは名古屋城駅北改札口。
手には紐を通した葉っぱの束。
真夏の夜のたぬきの夢。

最 終 選 考



←愛知淑徳大学有志の皆さんの厳正なる一次選考で入選した２０作品。ひと作品ずつ最終選考員の皆さんに読んでいただきました。
今年の選考もオンラインでしたが、選考員の皆さんが入賞の決め手などを話し合い、合議で５作品を決定いたしました。

コトノハなごやサロン

←１月２０日（土）名古屋能楽堂会議室にて入賞者を発表し、授賞式を開催しました。

授賞式での記念撮影。→

←授賞式後は入選２０作品の講評トーク。入選者の皆さんには、プロと直に対話できる貴重な時間を過ごしていただきました。

メディア掲載・広報普及活動

「名古屋」を感じる短編書こう

「コトノハなごや」募集　課題写真から着想を

「コトノハなごや」サノさんが最高賞　名城線舞台に文芸作品

↑中日新聞ウェブ2024.1.22

←中日新聞2023.8.3

↑「ステキブンゲイ」サイトトップページバナー 2023.7.15-8.31

↑「公募ガイド」2023.8

（中日新聞）2023.8.3朝刊、2023.8.17三重版、2024.1.22夕刊、ウェブ版2023.8.3、2024.1.22
（ウェブ媒体）docomoニュース2023.8　公募ガイド2023.8　公募ストック2023.8　登竜門2023.8
「ステキブンゲイ」サイト、「ナニヨモ」サイト トップページバナー
（チラシ配架）市内施設・図書館、市内協力書店、県内高等学校・大学

制作物

↑公式ウェブサイト（応募フォーム含）

↑作品募集チラシ（A4 カラー・表面）

↑作品募集チラシ（A4 カラー・裏面）

●一次選考用ドライブ　●非公式 SNS（X / 旧Twitter、Facebook、Instagram）

開催概要

●事業名称　コトノハなごや

●募集期間　２０２３年7月１５日（土）～8月３１日（木）

●事業趣旨　文芸を通じてなごやの魅力を深堀りする機会をつくり、メディアツールを活用して、なごやへの愛着を醸成していく。

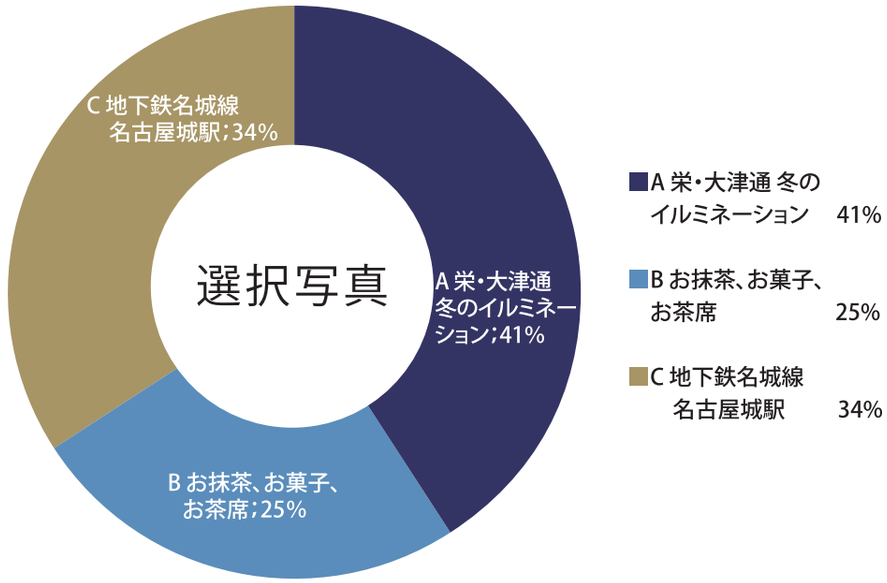
●事業概要　作品募集プログラム、入賞作品授賞式、選考員講評トーク「コトノハなごやサロン」、広報普及活動

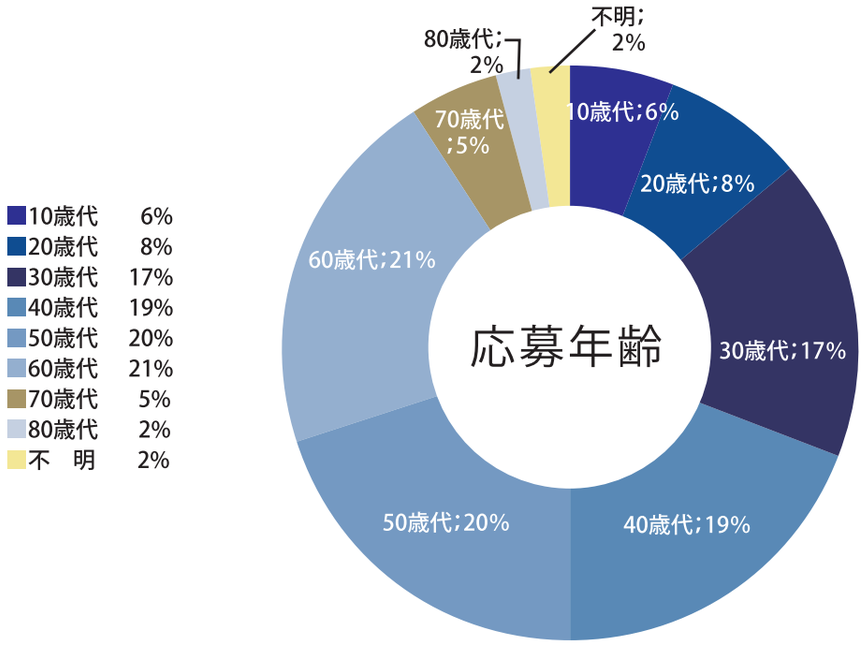
スケジュール

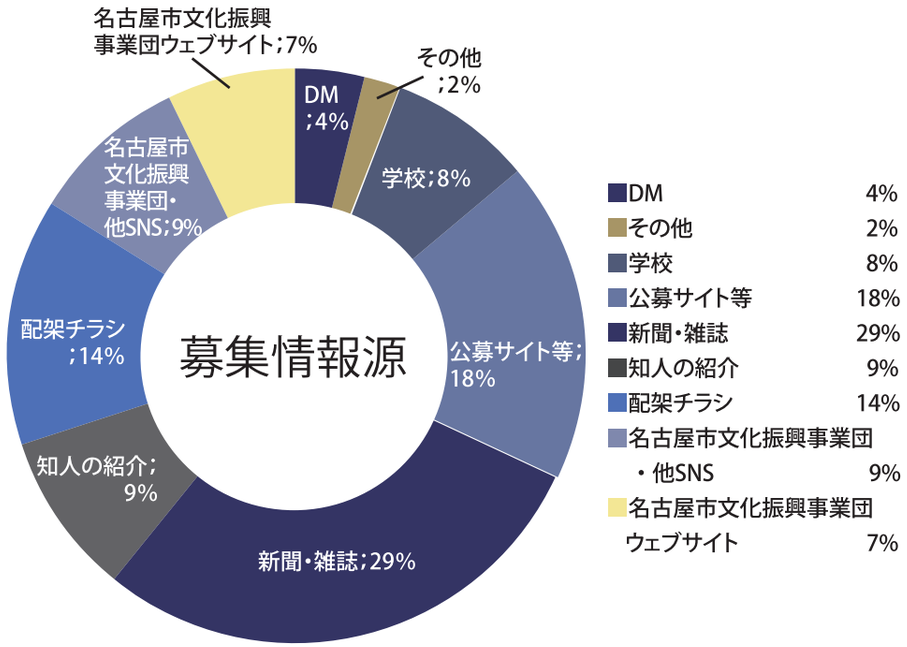
2023年	7月	公式ウェブサイト公開、募集チラシ配布（市内施設等）
	7月１５日	作品募集開始
	8月３１日	作品募集終了
	9月下旬	一次選考開始（愛知淑徳大学有志による選考）
	１０月下旬	一次選考終了、入選２０作品の選出
	１０月２５日	公式ウェブサイトにて入選２０作品の発表
	１１月下旬	選考員による最終選考
2024年	1月２０日	コトノハなごやサロン開催（入賞作品発表および授賞式、選考員による入選作品講評トーク「コトノハなごやサロン」公式ウェブサイトにて入賞作品の発表
	3月	開催報告発行（入賞５作品、入選１５作品、広報活動、募集結果データなどを掲載）

募集結果データ

●応募総数　３１３作品（郵送２４作品）／課題写真３枚







（過去の実績）

２０２２年度　応募総数２８５件（郵送１５件）／課題写真　３枚
２０２１年度　応募総数２７９作（郵送１７作）／課題写真　３枚
２０１９年度　応募総数３３６作（郵送　７作）／課題写真　５枚
２０１８年度　応募総数３５３作（郵送１１作）／課題写真１０枚
２０１７年度　応募総数１６５作（郵送　３作）／課題写真　５枚

ー広報ご協力ー

小説投稿サイト「ステキブンゲイ」

文芸・本のニュースサイト「ナニヨモ」

ー選考ご協力ー

愛知淑徳大学

ー課題写真ご協力ー

東邦不動産株式会社、松坂屋名古屋店、南大津通活性化協議会、
一般社団法人茶道裏千家淡交会、芳光、名古屋市交通局

ーアドバイザーー

石田美保（名古屋市観光文化交流局文化芸術推進課）

ー広報ご協力書店様（５０音順）ー

ON READING
紀伊國屋書店 名古屋空港店
紀伊國屋書店 プライムツリー赤池店
紀伊國屋書店 ｍｏｚｏワンダーシティ店
くまざわ書店 名古屋セントラルパーク店
言ノ葉堂
三省堂書店 名古屋本店
ジュンク堂書店 名古屋店
ジュンク堂書店 名古屋栄店
精文館書店 中島新町店
ちくさ正文館書店（2023.7閉店）
TSUTAYA BOOKSTORE 名鉄名古屋店
天狼院書店 名古屋天狼院
TOUTEN BOOKSTORE
ＭＡＲＵＺＥＮ名古屋本店
ＭＡＲＵＺＥＮアスナル金山店
ＭＡＲＵＺＥＮイオンタウン千種店
ＭＡＲＵＺＥＮヒルズウォーク徳重店

2024.3